

議 事 調 書

事 案 の 表 示	令和6年度第1回聖籠町総合教育会議			
場 所	聖籠町役場 第3会議室			
日 時	令和6年7月25日(木)午前10時30分から午前11時30分			
出 席 者	会 議 構 成 者	聖 籠 町 長	西脇 道夫	
		教 育 長	近藤 朗	
		教 育 委 員	佐藤 政志	
			佐久間千都	
			高橋 真弓	
			高橋 恵	
	事 務 局	総 合 政 策 課	課 長	高橋 誠司
			課長補佐	小林 幸宏
		子 ども 教 育 課	課 長	佐藤 寿
		教 育 未 来 課	課 長	須貝 克徳
		聖 籠 中 学 校	校 長	丹後 直子
【会議の要旨】 別紙のとおり				

<p>議事</p> <p>町長</p>	<p>聖籠中学校の教科センター方式について</p> <p>現在の聖籠中学校は教科センター方式で開校し、20年以上経過しているため、検証する必要があると考えている。</p> <p>そのため、今の中学校の現状を含めて教育委員の皆さんと検証していきたい。</p> <p>中学校の統合は、平成6年度に行われた町長選挙において公約として掲げられ、その議論の中で教科センター方式が選択され、今の聖籠中学校が建設されている。その過程では町民に対する説明会や建設費については議会の承認を得ていることから、ある意味、町の総意として決定されたものであったと思う。</p> <p>なお、教科センター方式を議題としているが、これをすぐに変えるために議論するものではないので、誤解のないようお願いしたい。時間をかけて様々な議論をしていきたいと考えている。</p> <p>それでは、最初に現在の中学校に教科センター方式が導入された経緯について、事務局から説明をお願いします。</p>
<p>総合政策課 課長補佐</p>	<p>最初に教科センター方式とは、固定された教室で授業を受けるのではなく、教科ごとに分かれた専門教室に生徒が移動し授業を受ける方式で、生徒は机のないホームベースと呼ばれるところに道具を置き、そこを拠点に活動するというもの。</p> <p>経緯については、昭和30年に聖籠村と亀代村が合併したが、中学校の統合は今後の検討課題として棚上げされ、その後も財源の問題、跡地利用の課題や住民理解が得られないという理由で進展せず、旧村地区の意識が残り、交流も深まらないなどの状況が続いていた。</p> <p>平成6年度の町長選挙で中学校の統合が公約として挙げられ、平成8年度から具体的な取組が始まり、平成13年4月の開校を目指して建設推進委員会が設置され、建設位置、建物、通学路などについて審議され、その過程の中で教科センター方式の導入も検討されていった。</p> <p>以下、時系列に説明するが、聖籠町統合中学校建設推進委員会（以下「建設推進委員会」）の設置条例が平成8年3月に制定され、実質的な検討がスタート。5月には建設推進委員会が発足し、大学教授、元県教育長などの学識経験者のほか、団体の代表者や一般町民を含めた20名で構成されていた。</p> <p>9月には建設推進委員会で、福島県三春町の岩井中学校の視察を行う。ここは教科センター方式を導入している中学校で、これ以降統合中学校への強化センター方式の導入の動きが進んでいった。</p> <p>平成9年1月に中間答申（第1次答申）が行われ、建設位置を蓮瀉地内の河内神社付近か諏訪山地内の町民会館付近にすることを答申した。これを受け、町は、同年の5月に建設予定地は現在の位置である蓮瀉地内にすることを決定。</p> <p>また、同月には、教科センター方式と校舎建設の検討が始まり、建設推進委員は教科センター方式を中心に先進視察や勉強会などを行い、校舎建設にあたっての基本的な考え方の検討が行われていった。</p>

9月には第2次答申を行い「日本一生き生きした中学校」とする基本構想を示し、教科センター型と普通教室型の調和をとることを求めた。

この答申を受け、町と教育委員会は教科センター方式を基本とする方針で建設を検討するということを広報等で公表。

これと同時に聖籠町統合中学校建設委員会を設置するための条例を制定。これは町議会議員、学識経験者、建築家、学校関係者を中心とした20名により、どのような校舎にするかを検討するものであった。

10月には地域住民に学習会形式で教科センター方式の説明会と中学校教員のヒアリングを実施。

12月には建設推進委員会から、通学路に関する答申が行われ、安全性、距離性、快適性、地域活性化を踏まえた具体的な整備項目を示し、通学手段については教育的意義を踏まえて住民と話し合っただけで検討すべきとした。なおこの答申を最後に同委員会は解散。

平成10年の1月から3月には、中学校教員への2回目のヒアリングと中学生へのヒアリングとアンケート調査を実施。教員からは要望や教科センター方式についての疑問や問題点も多く出され、中学生からは新しい施設に関する要望が多く出された。

4月から6月には、建設委員会では当時教科センター方式を導入している4つの中学校を視察し、教育委員会も町民の理解を深めるため、町民向けの教科センター方式導入学校への視察を実施。

7月には建設委員会が、基本設計の途中案として、具体的な建物レイアウトを提示し、この案に基づき審議が進められていった。

また、各小学校で住民説明会を開催し、建設計画などを説明。保護者からは教科センター方式に対する不安や疑問の声が多く出されたが、教育委員会は経緯やメリット、先進地学校での成果などを説明し、理解を求めた。

8月以降には、文部科学省指定の「インテリジェント化パイロットモデル研究推進協議会」と県内の中学校教師48名で構成された「聖籠町統合中学校研究会」により統合中学校のあり方の研究が多様な角度から検討された。

この検討を受け、平成11年の3月に建設委員会は教科センター方式に対応する校舎建築基本計画に関する答申を提出。

この答申を受け、町は教科センター方式に対応した校舎の建設を進め、平成13年4月に現在の聖籠中学校が開校した。

参考までに事業費は、建設費に関しては校舎、体育館、グラウンド、外構・造成、備品、用地取得などを合わせると約58億4500万円。

その他に通学路の整備費として9億2800万円。

情報機器・ネットワーク関係が5年リースの総額で約2億3800万円。

合計で約70億1100万円という事業費であった。

この建設費の財源内訳は、国庫補助金が12億4600万円。起債額が2億2200万円。一般財源は23億7700万円であった。

この出典は、配布してある町と教育委員会が作成した「聖籠町立聖籠中学への道」

(別紙) 会議の要旨

	<p>から抜粋したものである。</p>
町長	<p>経緯の概略としてはこのような流れであったということを念頭においていただければと思う。</p> <p>次に、中学校の現状について、コロナ禍で現場では様々な制限もあったとのことだが、どのような形で授業が行われているかを丹後校長から話してほしい。</p>
聖籠中学校 校長	<p>コロナ禍により、生徒が交流するような行動が制限され、固定した学級単位での学習や行動となり、現在もそれを継続している状況である。</p> <p>教科センター方式については、以前の状況を知っている教員が若干いるので、メリットやデメリットを聞き取りしてきたのでお話ししたい。</p> <p>メリットとしては、教科ごとに教室があるので、その教科の特性に応じた掲示物の工夫や図書の整備など教科の環境整備がしやすいこと。また教科ごとに教務室があるので、授業の振り返りや生徒の様子を共有でき、教科部会もすぐにできるという利点がある。</p> <p>生徒にとっては、ホームベースを拠点に教室を移動することは、自分が次に何をすればいいかという目的を持って行動するようになるので、自主性が育まれていく効果や自ら学びに向かうという意欲意識が高まることが期待できる。</p> <p>次にデメリットは、自分のことは自分で決めて行動できる生徒ばかりではなく、友達と声を掛け合っただけの活動ができずに孤立する生徒もいる。そのような傾向の生徒にとっては、教室の移動は苦痛であると感じていたと聞いている。</p> <p>教員側のデメリットは、教科センター方式を経験したことのある教員がいないため、慣れるまで時間がかかり、教員の異動があるとまた1からのスタートとなり、このシステムの定着が難しいこと。また、学校は教科指導だけではなく、特別活動、特に学級・学年経営や生徒指導も大きな柱であるが、このような点から教員への指導が困難なところもあり、若手教員の育成も悩みであったとのこと。</p> <p>教科センター方式については、現在も数学で2クラスを3つに分けて少人数による学習を行っている。他の教科については教員数が足りないため、実施できない状態である。</p> <p>通常の学級のメリットとしては、教室移動がないので生徒たちは10分間を有効活用でき、また教室が生徒にとって居場所となり、安心して過ごせる心理的安全性が保障されることも大きな利点である。その心理的安全性を担保するため、温かな学級を醸成するように教員は努力をしている。</p> <p>また、移動がないため生徒の安全管理がしやすいということもある。</p> <p>通常の学級方式でのデメリットもある。今の聖籠中学校は教務室がそれぞれの教科にあるため、学年学級の打ち合わせが難しく、教室サイズもそれぞれ違うため、学級方式にそぐわない部分もある。またホームベースが十分に活用できていないことも課題である。</p> <p>また、先ほど教室が心理的安全性を確保するベースになるという話をしたが、逆に学級方式に不適應の生徒もいるので、そこは課題であるが、教科センター方式をすれば改善できるかは、わからないところである。</p>

(別紙) 会議の要旨

町長	教育長から補足があればお願いしたい。
教育長	<p>私が、指導主事として聖籠町にいた当時の状況などを整理すると、暴力案件は激減し、不登校の生徒の数も減った状況があった。</p> <p>ただ、暴力案件はその後も低い状態が続いたが、不登校の生徒はまた増減をくり返している状況となっている。</p> <p>学習の定着状況については、さほど変化がなかったかと思う。</p> <p>当時の校長と話をした時に、教科の専門性がある中学校の特性からすれば、教科で教員がまとまっていることはいいと思うと言っていたが、子どもはどこに軸を置いて学校生活を送るのだろうかということを感じていた。自主的に動いている子もいれば、誰かについていくような状況もあり、居場所はあるのだろうか心配していた。</p> <p>大事なことは子どもたちにとってどうかということで、先生が便利であることもいいが、そのことが子どもたちにどう影響していたかは、私がいた3年では捉えきれないところがあった。</p>
町長	<p>校長と教育長から現状と当時の話をしていただいた。</p> <p>委員の皆さんから、不明な点や疑問があればお願いしたい。</p>
教育委員	教科センター方式で進めようと思った大きな要因は、学校側にあったのか町民の希望だったのか。
総合政策課長	当時は国の方針として、「ゆとり教育」が推進されていた。それに基づき町の検討が始まり、町民が参画して進められたが、その中で教科センター方式がゆとり教育にあっていなかったのではないかと思う。
教育委員	当時は、中学生の問題行動が多く、環境を変えようと聞いたことがあるが、そういうこともあったのか。
町長	私は、旧聖籠中学校の最後のPTA会長で、定期的に子どもたちの様子を見にいていたが、特段問題のあるようなことはなかったと思う。旧亀代中学校のPTAとも統合の関係で交流もあったが、特に話は聞こえてこなかった。
教員委員	<p>なぜ教科センター方式が検討されたかについて、当時直接かかわったわけではないが、町民と当時の保護者としての私自身の見解としては、2つ中学校を統合し、新しい学校を作るんだという時に、従来の学校ではインパクトが足りない、何か特色を出したいという思惑があり、そこに学力的に厳しい状況も改善しなければならないという中で出てきたのが、教科センター方式であったかと思う。</p> <p>教科センター方式は、当時全国的には非常に少数であったが、画期的なものであり、その説明を聞いている限りは、非常に良いものだというイメージを受けたかと思う。</p> <p>しかし教科センター方式は、県内では導入しているところはなく、町民も先生方も教科センター方式がいいのか悪いのかは分からない状況の中で、話を聞いている限りは、夢を抱かせるようなものであったかと思う。</p> <p>町民の総意という話もあったが、聖籠町の子どもたちを理解し、教科センター方式を理解した上で、教科センター方式がいいというスタートではなかったと思う。</p> <p>聖籠町の子どもたちの学力を上げるには教科センター方式は良さそうだということ</p>

(別紙) 会議の要旨

	<p>で、あくまでも学力向上対策としてスタートをしたもので、もちろん学力だけではなく、中心はそこであったかと思っている。</p>
教育委員	<p>当時視察に行った教科センター方式を取り入れていた学校の現状、全国での教科センター方式の導入状況とそのメリットとデメリットを知りたい。</p>
総合政策課長	<p>状況を調べて、次の会議でお知らせしたい。</p>
教育委員	<p>コロナ禍で教室移動を差し控え、学級方式に切り替えたわけだが、コロナが5類となり体育祭や他の行事が通常どおり再開されている中、子どもたちの教室移動による授業に戻ってない理由についてお教えていただきたい。</p> <p>昨年度、4月は学級を母体とした学級方式で子どもたちに学校生活に慣れさせ、一定期間を置いた後に教科センター方式にする予定という話を聞いていたが、それが全教科にわたって行われたかを確認していなかったため、教えていただきたい。</p>
聖籠中学校 校長	<p>昨年、新型コロナウイルス感染症が5類となり、教科センター方式による授業を再開したが、混乱がありうまくいかなかったこともあり、現在は学級方式で授業を実施している状況である。</p> <p>再開した時、生徒からはいろいろな生徒や他学年と交流ができて楽しかったとの声もあったが、安全管理上に課題があり、いるはずの生徒がいないなどの混乱が生じていた。</p> <p>そのため昨年度末に教員と相談をして、学級という母体がある方が良いのではないかとこのことで、現在は学級方式で授業を行っている。</p> <p>なお、数学については、学級を少人数に分割して、教科センター方式に近い形でやっている。</p>
教育委員	<p>数学の少人数学習については、2クラスを3つに分割して行っているだけで、聖籠中学校の教科センター方式の定義からすれば、教科センター方式ではないと思う。</p> <p>教科センター方式と呼べるものは、今は行っていないのではないか。</p>
教育長	<p>少人数の学習指導はどこでも行われているため、数学が教科センター方式で行っているかと言われればと違うと思う。</p> <p>教科センター方式は、ホームベースという自由な居場所を作り、学級という固定した集団を作らないものであることから、その考え方からすれば、数学の少人数学習のやり方は教科センター方式とは違うと思う。</p>

(別紙) 会議の要旨

教育委員	<p>教科センター方式を単に生徒が教室を移動するものと捉えるのは少し違うと思う。過去に校長として聖籠中学校にいたことがあり、当時の話をすると柱はいくつかあり、一つは生活空間と学習空間を分離生活すること。生活はホームベース、学習は教室で、ホームベースが生活空間と学習スペースを分離するものであった。</p> <p>2つ目は集団を固定しないこと。集団を固定化すると人間関係も固定化されてしまうことから、多様な学習集団として3つくらいの集団を作っていた。</p> <p>3つ目は1単位を70分授業とすること。休憩は移動時間も含め15分とした。</p> <p>4つ目は町講師（町採用の教員）の配置。当時は5人ぐらい配置されていた。5人の町講師により少人数学習を支えていた。</p> <p>これらと校舎のインフラを含めた条件が4つの柱となって、初めて教科センター方式が成り立っていたが、この20年の間にこれらの柱が修正または発展的解消というのか、今の状況になっているかと思う。</p> <p>今後、聖籠中学校の教科センター方式を議論するのであれば、どの段階の何を議論するのか、単に子どもの移動だけ議論するのか、設立当初まで戻って議論するのかということを考えていかないと、なかなか結論が見えてこないという気がする。</p>
町長	<p>なかなか難しい話だと思うが、今日は当初と現状がどうなのかを関わってきた方の話を含めて、理解していただければと思っている。</p> <p>今後も、教科センター方式の検証も行いながら、議論を深めていければと思う。</p> <p>また、聖籠中学校は教科センター方式を前提に建設しているため、これを変更する場合の物理的な課題もある。これについて、事務局から説明願いたい。</p>
子ども教育課長	<p>聖籠中学校は、教科センター方式のためにホームベースと各教科教室がある形式で、国の補助金も活用し建設している。</p> <p>国の補助金を活用した建築物は、用途を変更する場合は制約がある。具体的には、木造は24年、鉄筋は60年を経過しないものを変更や廃止する場合は、国への協議が必要であり、場合によっては補助金返還の義務が生じることがある。</p> <p>聖籠中学校については、木造と鉄筋が混在している建築物であり、いずれもこの期間を経過していないため、仮に教室の改築などをしようとした場合は、国への協議として目的や経緯を示した書類を提出し承認を得る必要がある。</p> <p>ただし、学校運営という本来の目的を変えないようであれば、補助金の返還は生じないことを国に確認している。</p>

(別紙) 会議の要旨

<p>町長</p>	<p>これについては、教室やホームページなどを今後どう活用するかの議論を進めていくうえで、補助金も関係してくる可能性というものである。</p> <p>それでは、先ほど質問のあった教科センター方式を導入している他学校の現在の状況について調査し、次回の会議でお知らせしたいと思う。</p> <p>この会議の進め方としては、繰り返しとなるが、教科センター方式を今すぐにどうするということではなく、開校してから20年以上経過しているため、その検証を行いながら議論を重ね方向性を見出していきたいと思っている。その中で、学力向上の問題も議論となるかもしれない。方向性を想定しているわけではないので、いろいろな議論を重ねていきたいと思うが、今後の会議の進め方としては、この方向でよろしいか。</p> <p>(異議なし)</p> <p>次回の会議については、資料が用意できた段階で開催したいと考えている。</p> <p>以上で議事を終了する。</p>
-----------	---